

[目的] 平成元年に策定された厚生省の「ゴールドプラン」、及び在宅療養を可能にする各種機器の発達とともに、在宅看護が進められている。在宅看護の代表的なものに在宅酸素療法(HOT)があるが、濃縮酸素器の小型化と、機器利用への健康保険の適用は、人生の最後を病院で過ごすしか方法のなかった肺結核、肺気腫等の後遺症を持つ人たちに、在宅での療養を可能にした。本研究では、クオリティ・オブ・ライフの面からも注目されている在宅酸素療法について、それがもたらしたものを探る。具体的には、①療養をする場所としての「家」と「病院」の持つ意味、②酸素の機械と患者の生活の関係に焦点をあてて報告する。

[方法] 国立刀根山病院に通院する在宅酸素療法の患者のうち、了解を得られた24名について、1994年8月から1995年2月まで面接による予備調査を行い、その知見をもとに、1995年10月から、同じく在宅酸素療法を行っている122名を対象に留め置き質問紙調査を行なった。

[結果] 一人暮らしの者も含め、在宅希望は、83.5%と圧倒的に多いが、その理由を見ると、自由、人間関係など、家族の存在というよりむしろ自分の生活圏、つまり「巣」としての意味が多く含まれていることがわかった。また、行動を広げるはずの酸素の機器が必ずしも広げるものとなっておらず、利用の仕方は利用する者のそれまでの生活層等に深く関連することがわかった。これらのことから、援助機器を導入した在宅療法を考える場合には、生活歴からの視点が欠かせないことが示唆された。